



## 保育雑評

守 永 英 子

有名な童話の中に「はだかの王さま」という話がある。「王さまの着物が見えないのはバカ者だ」といわれると、皆、はだかの王さまをみても、着物が見えていような顔をするのである。

人間は弱い。大勢のあるところにつこうとするのは人情であろう。たとえ「王さまははだかだ」と心に思っても、公の場でそれを口にするには、大変に勇気がいることである。

公式の発言でなく、現場の片隅の自由な語らいの中に、本当のものを探そうとする心は、こんなところにある。

▼「最近、この地域では、やっと六領域のことを言わなくなりました」とは、ある私立幼稚園の園長先生の話。

研究会を開いて、地域の幼稚園の啓蒙に努力しているこの先生は、少しずつ努

力が実ってきたといったようであった。「六領域」の考え方が、いかに現場にとってマイナスになっているかを、言外に意味しているようである。

▼幼稚園教育指導書の一般篇が出たときの話——。「一般篇は大分よくなってきただけれど、いっそ「六領域」の考え方はよくなかったと、はっきり認めて、撤回した方がわかりやすいのに……」とは、ある保育理論担当の先生の言葉。

「六領域」についての批判はしばしば耳にするとところであるが、文部省の耳に達しているのであろうか。

▼「個人差に合わせた、きめの細かい指導をするには、一学級二十五人から三十人位におさえてほしい。一学級四十人以下などという設置基準をそのままにしておいて、指導書ばかりを書き直してみ

も、現場はよくならないのでは……」とは、現場の声。

▼指導書について——。「委員の名をたくさん連ねても、筋書は、二、三のきまつた顔ぶれで作ってあるようだ。新しい人からよい意見がでて、結局はとりあげられないし、十分意見を交して作りあげられるというものでもないで、あまり意味がない……」とは、経験豊かな先生の話。

「六領域」と同様、「指導書」についての批判も多い。「不適當な指導例があげられている」との声もある。せっかく文部省から出す指導書である。「一つの例に過ぎません」ではすまされまい。

▼「教育の問題」は「人（教師）」の問題に帰するのではないか。何よりも、よい教師を作ることが先決。……とは「問

題の子ども」に取りくみながら、横から教育界を眺めているある研究所員の感慨。

自由な場には自由な発言があり、自由な発言の中には、チクリとした真実がある。これを他の批判に終わらせず、これらの自由な発言の中から、「保育の問題」を掘りおこし、真実を探さねばならない。

川喜田二郎氏（「発想法」の著者）の次の言葉に、現場は大きな励しを見出すのではなからうか。

「現場の経験というものは久しいあいだ、学問をはじめとして理論的な関心のある人びとによってほとんど無視され、ときにはそのような経験を活用すること

が非学問的なこととして、軽蔑すらうけてきた。ところが、実はこの現場の経験なるものこそ、まさに新しいものを生み出す力の源泉だと断じなければならぬ。……（中略）……真の權威の源泉は現場の事実のなかにある。この点が今日、とくに徹底的に強調されねばならない。このような事実をふまえて、新しいものを生み出す第一歩をすることこそが、ほんとうに創造的であり、また生産的なことである。……」

保育者自身が己の足もとの事実の中に、保育の真実を探さなければならぬ。そう覚悟を決めねばならないときが、今来ているような気がしてならないのである。